【参考】２０１１国際森林年の実施状況

平成23年4月14日　国際森林年国内委員会資料

第１回国際森林年国内委員会

- １２月１６日、篠原副大臣の出席を得て、第１回国際森林年国内委員会を開催。
- 国際森林年のテーマを「森を歩く」と決定。
- サブテーマとして「未来に向かって日本の森を活かそう」、「森林・林業再生元年」を決定。

国際生物多様性年と国際森林年とのブリッジングセレモニー

- １２月１８日、石川県金沢市で国際的な橋渡しの式典を実施。
- 鹿野農林水産大臣、松本環境大臣、UNFFマッカルパイン事務局長、CBDジョグラフ事務局長ほかが出席。
- 国内委員会より、飯塚昌男委員及び沼田早苗委員が参加。

国連森林フォーラム（ＵＮＦＦ）閣僚級会合

- ２月２日～３日、米国ニューヨークの国連本部において、UNFF閣僚級会合が開催。
- 我が国主催のサイドイベント（約20カ国、60名参加）等で緑化運動をはじめ国際森林年の取組を説明。
- 国際森林映画祭の受賞作品発表。

地球のために木を植える子ども達のイニシアティブ　のプレゼン風景

ロゴマーク使用の簡素化

- ロゴマークの使用手続きは国連森林フォーラム（UNFF）へ英語でメールと申請書を送付する必要があった。
- 我が国ではUNFFとの合意により、フォレスト・サポーターズのウェブサイト上でロゴマークをダウンロードできる仕組みを構築。
- ４月12日現在、200の企業、NPO等が利用。

元旦の各新聞での露出（この他、各地方紙でも特集記事あり）

住友林業による企業広告
1月1日付け主要各紙

日本たばこによる広告記事
1月1日付け毎日新聞

ロゴマーク使用の事例

サントリーによる企業広告
２月４日付け毎日新聞

国際森林年国内委員会委員による新聞記事

養老孟司氏
（1月18日付け毎日新聞）

Newspaper in Education　NIE　教育に新聞を

養老先生の　キカイ人間学（にんげんがく）

1/18 毎日 20

思いこみにとらわれた現代人の頭は、しばしばモノゴトの本質を見誤る、と解剖学者の養老孟司先生は言う。頭をやわらかくして別の方向から見ると、どんなふうに見えるだろう。頭でっかちの大人になりたくない君たちのために、先生がそのユニークな視点で、世の中のさまざまなモノゴトを語ります。

木林

2011年は国際森林年です。なぜ「国際」なのかというと、木を切ったとして、それが発展途上国なら、その国で使うより、たとえば日本に売ってしまうからです。高く売れるから当然ですよね。その国だけで森を守ろうといってもうまくいきません。だから国際的に相談するんです。

喜んで買ってくれるなら、切ってもいいんじゃないか。そうですけど、木が育つには年数がかかります。それを考えないで切ると、いずれ森が消えてしまいます。そうなったら、もう切る木がなくなってしまいます。

どうやって森を守る？

面倒くさがらず考えよう

木を切っても、森ができるだけ元のままでいるようにするには、どうすればいいか。100年かかって育った木を1本切るとします。その分、1本植えたらいいだろ。そうはいきません。100年の木が1年目の木になってしまいます。あと100年は、その木は切れません。

じつは1年目から100年目までの木が100本、つまりそれぞれ1本ずつあるなら、それでいいんです。1年に1本ずつ切って1本ずつ植える。全部切るのに100年かかりますが、100年目には最初に植えた木が100年の木になっています。これが森を維持するということなんです。

あんがい、考えるのが面倒でしょ。だから売れるなら、切ってしまうんでしょうね。それでつい切りすぎてしまう。日本もそういう時期がありました。40年ほど前までです。それで大急ぎで杉を植えたから、国民が大勢、花粉症になりました。

森は一度に切ってはいけません。毎年育つ分だけ、切っていいのです。面倒くさがらないで、どうしたら森が維持できるのか、まずはそれをちゃんと考えてくださいね。

（解剖学者・養老孟司）

国際森林年

森林の持続的な経営、保全を各国にうながすため、国際連合（国連、本部ニューヨーク）が2006年に定めた。国際会議やイベントが各地で開かれる。

©YORO/SATO

イラスト・佐藤学

坂本龍一氏
（2月28日付け産経新聞）

2/28 産経 18

森と都市の橋渡し　地球を次代につなぐ

木質エネルギーの山へ転換した新潟の新津丘陵は、かつて石油をくみ上げたやぐらが残る。脱化石燃料の観点からもシンボリックな場所だ

今回は、ぼくが2007年から取り組んでいる森づくりの活動を紹介しましょう。

最近では、昨年の11月。新潟県長岡市でのコンサートを終えた翌朝、新津丘陵（新潟市）に行ってきました。

森に入ると、間伐されているので、日光がきれいに差し込んでいて、美しい。ここは、かつて日本一の産油地として栄えた山で、いまは間伐して切られた木をそのまま放置するのではなく、木質燃料（ペレット）に加工しています。

その取り組みをしている地元の木質ペレット推進協議会と新潟市、ぼくが主宰する森林保全団体、モア・トゥリーズが、ともに森林づくりとペレットの利用を進める協定を結びました。森林整備などで得る二酸化炭素（CO_2）の排出削減分を企業に販売し、その利益を保全活動に還元していきます。

このように、モア・トゥリーズが協力している森は、現在国内8カ所になり、予想を超えるペースで増えています。

どうして皆さんの反応が良いのかと考えますと、やはり最近の気候変動や、山や森に対する危機感を肌で感じているせいではないでしょうか。

ただ、そう感じても、何ができるかわからない人も多いかと思います。そこで、都市に住む方たちと森を結ぶのが、モア・トゥリーズの一つの役目ではないかと思っています。

ぼくも、各地の森と協定を結ぶときは、泊まりがけで現地に行きます。地元の森林組合の方たちと、ときには夜遅くまでお酒をくみかわしながら、現場の生の声を聞くんですね。

すると、山で生きているからこそ、自然の変化にはより敏感で、低炭素社会に向かって自分たちは何ができるか、皆さんよく考えている。

そして、カーボン（二酸化炭素）・オフセット（相殺）などを活用すれば、林業がもう一度復活するかもしれない、という希望を皆さん持たれていて。

彼らは、本当に生活がかかっているので、助けを求めて、一緒にやろうとしてくれています。これはもう真剣にやらざるを得ないですよ。

最初、皆さん、なんで音楽家が森林をやっているんだって思うんですね。ぼくもちょっと不思議なんですけど。

いま、僕が思うこと　坂本龍一

題字とイラストは直筆

ただ、音楽家だからではなく、一人の人間として、ぼくらが享受した自然環境を次の世代にも残していきたいと思っています。（毎月第4月曜日掲載）

賛同企業 50社に

一般社団法人、モア・トゥリーズ（more trees）は、「もっと木を」という呼びかけのもと、坂本龍一さんら発起人と各界から100人以上の賛同人を得て、森林再生を目的に2007年設立。日本の森林で間伐を、熱帯地域では植林を進めている。

削減努力にもかかわらず排出されたCO_2など温室効果ガスを、他の場所で実現した排出削減分の購入や森林整備の活動などで埋め合わせるカーボン・オフセットの促進のため、環境省では08年、「オフセット・クレジット制度」を創設。国内のプロジェクトに対して、温室効果ガスの排出削減・吸収量を認証し、市場価値をもたせている。

それに基づき、モア・トゥリーズは、国内8カ所のプロジェクトと協定を締結。「オフセット・クレジット」を購入する企業との橋渡し役を務めているほか、間伐材を使った商品開発も進めている。現在、賛同企業は全日本空輸など約50社に上る。

モア・トゥリーズ公式HP
http：//www.more-trees.org/

「森を語る」新聞広告

- ２月２８日、CWニコル氏を起用した国際森林年特集の全面広告が読売新聞に掲載。
- 広告費の一部は海外の植林活動へ寄付される。
- 協賛企業は三井不動産、関電工、日本たばこ、九電工、デル、染めQテクノロジィ、須賀電工、サラヤ、弘電社の9社。

国際森林年特集記事の事例

2011・国際森林年

国際森林年広告特集

2011年は「国際森林年」。森林の大切さと、木を生かした営みへの理解促進を目指した取り組みが世界中で展開される。日本は世界屈指の森林国でありながら、森林の保全、利用、林業経営という点では欧州など他国を見習う点が多い。加えて日本は「京都議定書」で約束した二酸化炭素（CO_2）削減目標6％のうちの約3分の2にあたる3.8％を国内の森林で吸収することとしている。森林と木を活用した生活への認識を深め、実践していくポイントはどこにあるのか、「美しい森林（もり）づくり全国推進会議」代表の出井伸之氏に、森林と自然に寄せる思いを聞いた。

日本の森林を元気に

「美しい森林づくり推進国民運動」の推進組織として2007年に民間主導により設立された「美しい森林（もり）づくり全国推進会議」代表。木を植え、育て、使うという循環を取り戻し、元気な森づくりのための情報発信や交流促進を図っている。1995年にソニー社長就任後、会長兼グループCEOなどを歴任、現在、クオンタムリープ代表取締役を務める。

森を育てるには "木"の利用から

——日本の森林率は67%で、数字上は、世界有数の森林国ですが、実情をどうみていますか。

日本の森林のうち4割は人工林だ。戦後復興時にかけて、森林破壊が進んだが、その後、数十年にわたる造林の成果で森林は増えた。飛行機から見る森を他国と比べると、日本が恵まれた森林国であることを実感できるだろう。森林資産の美しさ、豊かさをよく知っておきたい。

この4年近く「美しい森林づくり全国推進会議」代表として、森づくりを考えてきたが、日本は長年、木を植えて増やすことだけしか進めてこなかったようだ。ただ木を増やせば良いということではない。人間が手を加えて育てることが必要だ。人工の森林を持続可能なものにするためには、計画的に森林全体の成長を考慮しながら伐採をする、持続的な取り組みが不可欠だ。それによって初めて森は生き生きとし、CO_2の吸収だけでなく、多様な生物の涵養（かんよう）等多くの恵みをもたらす資源となる。

——国が定めた「森林・林業再生プラン」では、2020年までに木材自給率を50％に高めることを目標としています。

戦後の造林から約40年にわたって日本の森林資源は蓄積されてきた。今後は育てつつ、有効利用する時期だ。幸い、古くから日本人は木と共に暮らしてきたし、木の良さを十分知っている。国産材を利用する機運を盛り上げることが必要だ。価格の面で輸入材が優位にあるとされているが、それは国内の木材流通システムが縮小してしまったことに大きな原因がありそうだ。目先の価格だけを見て近視眼的に考えるのではなく、消費者も住宅メーカーも、「社会コスト」の視点を取り入れて、国産材の持続可能な利用拡大に取り組んでほしいと思う。

——企業がもっと木を使うことを提唱されています。

生態系の循環を考えた場合、材料として木材を使った方がいいことは明白だ。長く第2次産業に携わってきた身として、第1次産業と第2次産業があまりにも分かれすぎていると感じる。木材利用に第2次産業の視点を入れてはどうか。第2次産業やサービス産業が培ってきた調達・流通ノウハウを生かして農業や林業に参入してもかまわないと思うし、それによって木材流通に新しい仕組みが生まれるのではないか。

林業は就業者の高齢化などから衰退産業といわれているが、植樹祭や育樹祭などに参加すると、日本の木を使った商品化に励む若者にたくさん出会う。日本の林業を再生させたいという強い意志を感じる。他の産業に携わる人たちは、ぜひこうした人々との出会いの場を活用してほしい。企業トップも製品やオフィス、工場にもっと木を使うことを検討してはどうか。

豊かな資源を生かす 林業再生「元年」

——消費者への訴求も大切になってきます。

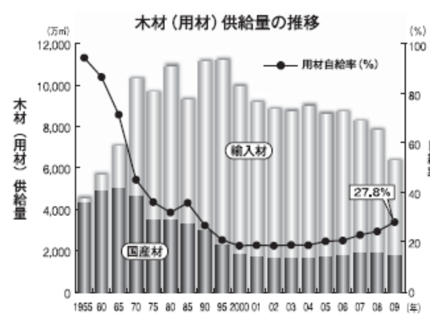
木を使った独創的な商品を作り出している人や企業にスポットを当てることはもとより、女性などにも木に親しんでもらう機会を増やすことが必要だ。木のおもちゃや、木の家は温かみと落ち着きを感じさせ、子どもを育てるにも適していると思う。それには木の良さや、木についての情報を提供するウェブサイトなどの情報源がもっと増えるといい。目的によって、どういう木が適しているのか、どこで入手できるか、加工は……。木について知りたくなってくると、実際に木を見たくなってくるだろう。そういうところから木を身近に感じることができるようになると思う。

——資源としても森林の重要性は高まっています。

日本は資源がないといわれるが、世界にもまれに見る豊かな森林資源がある。水もある。生物もいる。特に森林は水源涵養という重要な役割も担っている。エネルギー資源という面でも、間伐により出た木材をバイオマスエネルギーとして活用することが欧州では進んでいる。木はまったく無駄のない再生エネルギー源といえる。必要なのは労働力、そしてそれを価格競争力に反映させる工夫だ。

——国際森林年に寄せる抱負をお聞かせください。

自分の家もそうだが、日本の家には日本の木が適していると思う。家は人生のうちで最も大きな買い物の1つだから、少し価格が高くても、ぜひ日本の木材を利用してみてほしい。エコカーやエコ家電の次は国産の木を使う意識を高め、木を通じて日本の良さを再考する運動を広める年にしていきたい。



2011・国際森林年

今年は「国際森林年」である。テーマは「Forests for People（人々のための森林）」。世界中の森林の持続可能な経営と保全の重要性を広く認識してもらうことを目的として、各国で様々な取り組みが展開される。日本では「森を歩く」というテーマのもと、国土緑化推進機構や美しい森林づくり全国推進会議が協力し、森林の保護や育成、木材についての正しい理解促進などを目指した官民あげての活動が展開される。「森林・林業再生プラン」の実施元年でもある本年は、国民一人ひとりの意識の高まりが期待される。

"森を歩く"が日本のテーマ

地域とともに 「JPの森づくり運動」

手"紙"は木からつくられる——日本郵政（JP）にとって紙は事業に欠かせない大切なもの。そんなJPグループすべての願いをこめて2008年からスタートしたのが「JPの森づくり運動」だ。全国ネットワークを生かし、役員、社員がボランティアで植樹や育林に取り組んでいる。

その1つが千葉県君津市にある「久留里ドングリの森」。08年からNPO法人ドングリの会の協力も得て植樹をスタート。今年までの3年間で約10ヘクタールに植林を進める計画だ。

NPO法人「子どもの森づくり推進ネットワーク」が進める運動にも賛同し、全国の郵便局などが支援活動を行っている。幼稚園・保育園の子どもたちに、森づくりの体験を通して、自然の大切さを学んでもらおうという活動で、全国の都道府県に各1園のネットワークを完成している。

さらに全国のJPグループの拠点では、自治体などと協働した地域の森づくりや育林活動を継続的に進めている。

日経環境プロジェクト2011

Think Eco.

企画・制作
日本経済新聞社クロスメディア営業局

（3月10日付日経新聞） 三井物産、日本製紙、日本郵政との連携企画

ローソンによる国際森林年と緑の募金の呼びかけ（※東北関東大震災後は震災義援金へ変更）

- 国際森林年の幕開けを記念し、全国約1万店のローソングループ店頭でスヌーピーが国際森林年と緑の募金を呼びかけ。
- ローソン緑の募金の実績は、累計約30億円。
- 支援した森林整備活動は約2，300箇所。
- 植樹や間伐の手入れを行った本数は約1，425万本。

住友林業による「サステナブルフォレストギャラリー 2011」

- １月１５日～１６日、住友林業は有楽町駅前でドーム型展示を利用した普及啓発イベントを開催。
- １５日の国際森林年記念ステージ には鹿野大臣、市川社長、草野満代さんが出席し、木材利用の意義などについて説明。
- 来場者数は約5000名。

１月１５日付け共同ニュース

ライブドリアード２０１１

- パネルディスカッション、演劇、音楽を組み合わせた国際森林年記念ライブ。
- テーマは「木と共に暮らすライフ提案」。

日時：２月１４日（月）夕刻

場所：木材会館（新木場）

主演：「弥生」さん

主催：（社）創造再生研究所

後援：林野庁ほか

無人駅に木のぬくもり

「天使の椅子」を披露

2月15日付け東京新聞

「美しい森林づくり」企業・ＮＰＯ等交流フォーラム

- ２月１４日、国連大学において、田名部大臣政務官の出席により記念フォーラムを開催。
- 国連事務総長のビデオレター、大久保尚武経団連自然保護協会会長及びＣＷニコル氏の講演等。
- 「フォレスト・サポーターズ」及び「生物多様性民間参画パートナーシップ」が協働宣言に調印。

オーストリアシンポジウム「森からのエネルギー創出」

- ２月１４日（東京）、２月１５日（札幌）、オーストリア大使館主催のシンポジウムが開催（来場者数は併せて約５３０名）。
- 森林技術、バイオマス技術、木質建材に関する講演に加え、出展オーストリア企業１５社の製品・技術を紹介。
- シンポジウム後に個別商談会も開催。

持続可能な森林経営の挑戦に関する国際セミナー

- ３月８日～１０日、三田共用会議所において、各国政府、国際機関、民間企業、NGO等から専門家を招へいし開催。
- 持続可能な森林経営のための政策手段について、国内外の取組を討議。
- 国連森林フォーラム（UNFF）活動の一部として、結果を報告。

国際森林年子ども大使
ミュージカル「葉っぱのフレディ」

- 「お米大使」の小林幸子さん、「お魚大使」のさかなクンに続き、３月８日、「葉っぱのフレディ」の子役20名を国際森林年子ども大使に任命。
- ミュージカルは生命の尊さと循環をテーマにした作品であり、日野原重明先生の原案。
- ３月９日付け朝日新聞等で報道。

観光庁による「魅力ある日本のおみやげコンテスト」

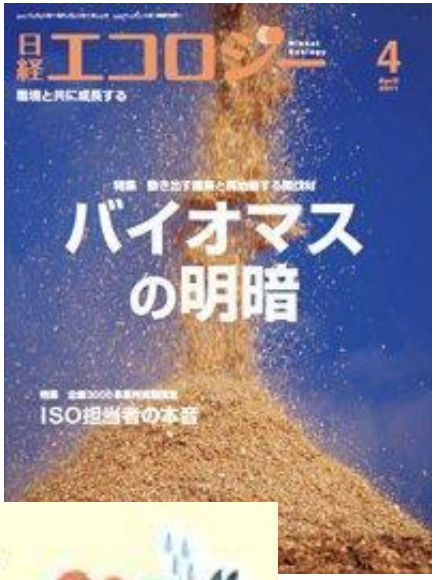
- 外国の方々からみて魅力的なおみやげを選定することにより、我が国の地域ブランドを高めるねらいのコンテスト。
- 本年度に限り、国産材を活用した「国際森林年特別賞」を設定。
- ３月９日（水）、「葉っぱのフレディ」も参加し、羽田空港にて授賞式を開催。

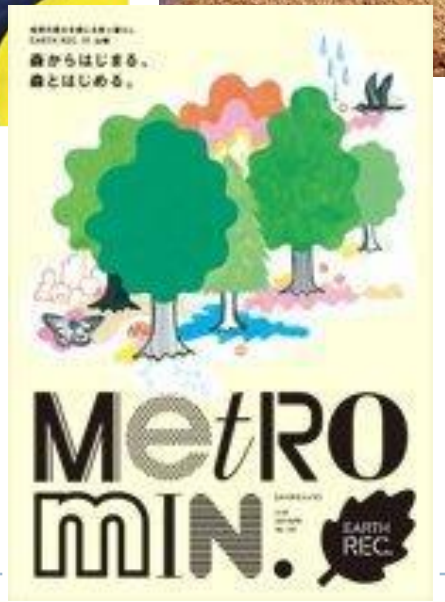
Japan. Endless Discovery.

国産材でつくる森のサイクル
木づかいニッポン

雑誌・インターネットでの露出

- 雑誌「環境会議」、「日経エコロジー」、「メトロミニッツ」において、国際森林年や森林・林業に関する特集記事が掲載。
- 雑誌「ecomom」のウェブサイトでは、国際森林年特設ページが開設。





国際森林年記念分収造林の実施

- ３月３日、全国の国有林野において国際森林年記念分収造林を実施することを各森林管理局へ通知
- 平成２３年度から２５年度までの３年間実施。
- これにより国民参加の森林づくりを促進。

通常の分収割合	→	国際森林年記念分収造林
契約者7割、国3割		契約者8割、国2割

TOUCH WOODケータイ

- 四万十ヒノキの間伐材をボディに利用した携帯電話　「TOUCH WOOD」が、3月28日より限定15,000台発売。
- ボディの間伐材は、一般社団法人「more trees」の森から提供。

※moreTrees®
音楽家の坂本龍一氏が代表。
日本において人工林の間伐促進を実践している環境団体。

（写真：NTTドコモ社）

「いのちの森づくりリレー植樹」

- 国際森林年にちなみ、宮脇昭名誉教授の指導によるリレー植樹の計画。
- 災害後20年を迎える雲仙普賢岳の大火砕流跡（今秋）など防災に力点を置いた植樹を含む。
- 東京都豊島区（5月22日）、白神山地（7月2日）、福島県川内村（9月25日）など全国で12か所。

沿岸にコンクリートの堤を累々と築くだけではなく　緑の防波堤を

森と共に生きる ③

防災を力点に

宮脇昭・横浜国立大名誉教授が指導

水と緑の地球環境

いのちの森づくりリレー植樹　主な開催予定地

植樹名称（仮称）	植樹予定地	開催予定日
❶いのちの森づくり植樹	静岡県掛川市倉真地区	4月30日
❷「いのちの森」植樹―グリーンとしま再生プロジェクト	東京都豊島区南長崎はらっぱ公園	5月22日
❸千年の森づくり植樹	北海道小樽市船上山	6月28日
❹白神山地植樹フェスタin　赤石川	青森県鰺ケ沢町赤石川上流域	7月2日
❺緑の国「いのちの森づくり」植樹	愛知県豊橋市石巻山	7月10日
❻楽しの森づくり植樹	山梨県北杜市の清里高原	7月24日
❼行田市親子植樹	埼玉県行田市内	9月4日
❽川内村いのちの森づくり植樹	福島県川内村立川内小学校	9月25日
❾実生の森づくり（正式名称）	熊本県水俣市エコパーク	11月20日
❿国際森林年記念雲仙普賢岳ふるさとの森林づくり	長崎県島原市おしが谷	今秋

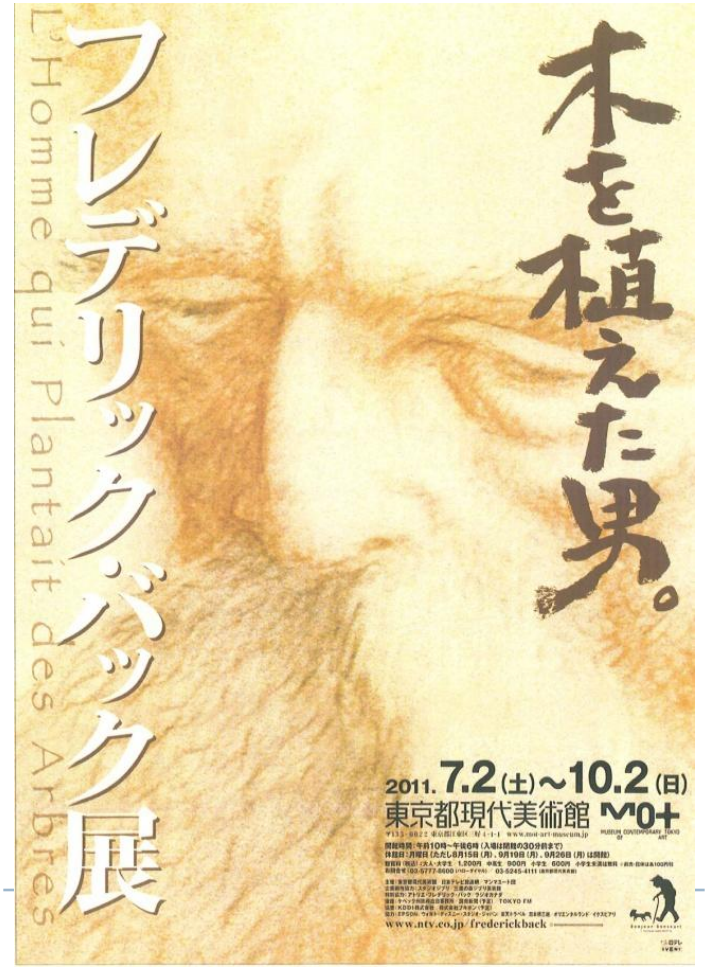
人命守る「リレー植樹」

（3月30日付け
毎日新聞）

計画中の取組（民間等）

- 東京都庭園美術館における「森と芸術」展示（４月１６日～７月３日）
- 国土緑化・国際森林年記念切手の発行（５月２０日）
- 「日本の森を元気にする」小学生作文コンクール（募集中）
- 国際森林年をテーマとしたポスターの公募展（９月～）
- 森を守ろうチャリティコンサート（７月１２日）　等

（例）「木を植えた男。」
フレデリック・バック展



国際森林年推進事業（平成23年度予算）

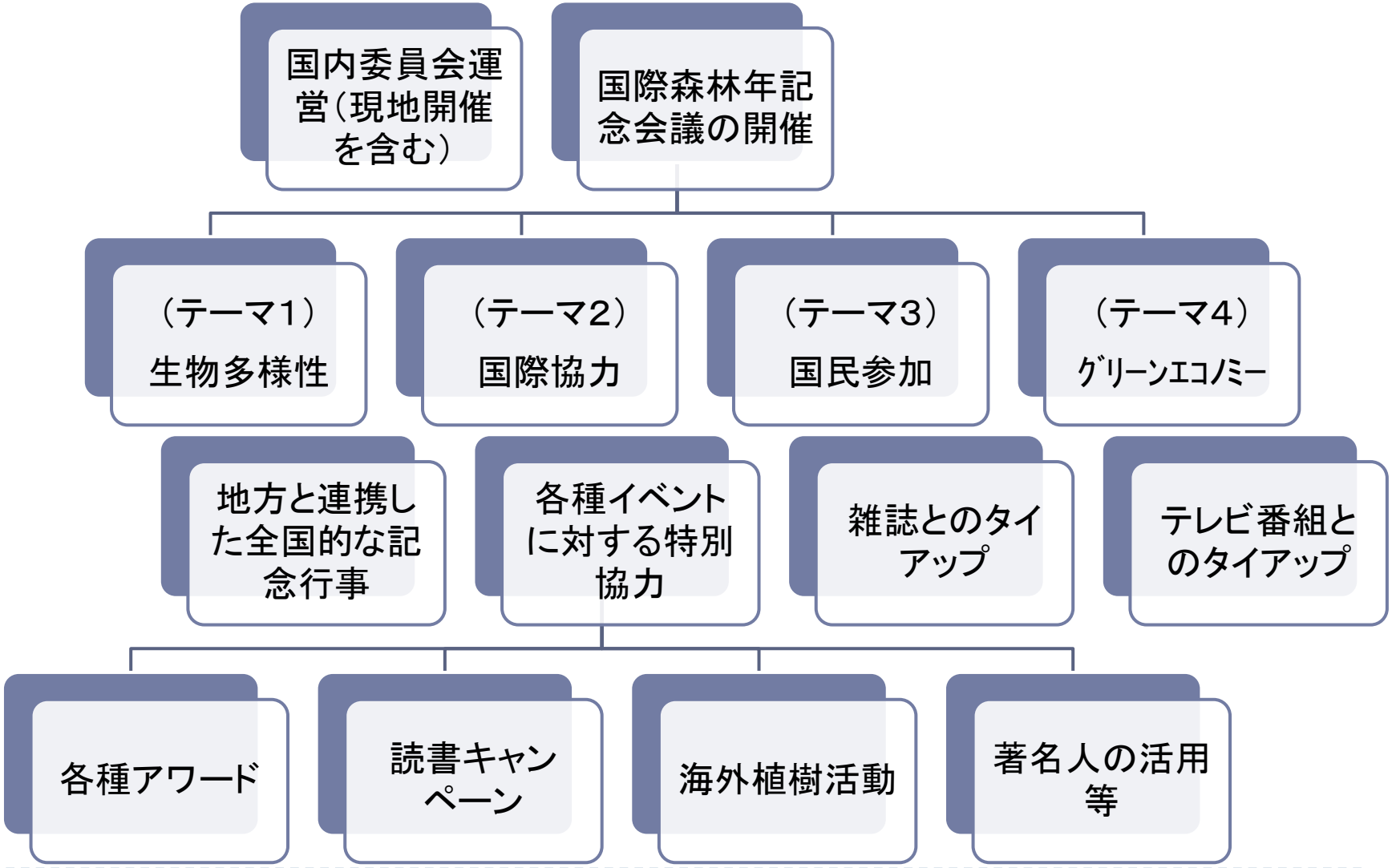
- 平成23年度予算案について、「国際森林年推進事業」（新規、3億円）を措置。
- 国際森林年という機会を捉えて普及活動を展開し、我が国における豊かな森林の維持、途上国の森林保全等に対する国民の理解を促す。

国際森林年国内委員会の運営

国際森林年普及事業の実施

国際森林年記念会議の開催

国際森林年推進事業の執行案



国際森林年記念会議等の具体案

国際森林年記念会議Ⅰ	・7月頃、「生物多様性・観光と森林」をテーマとして、COP10開催地である名古屋で開催。
第3回国内委員会	・7月を目途にアファンの森で開催し、以降の取組と宣言文等を検討。併せて森林の多面的な価値を体感する印象的な行事とする。
全国各地における「地域の森を歩く」シンポジウム	・地域の課題や特色に応じてサブテーマを設定し、様々な世代・立場から登壇者を設定。明治神宮の森での成果報告会も検討。
国際森林年記念会議Ⅱ	・9月頃、 国際的な行事として象徴的な地球環境フォーラムを活用し、国際的な動向や取組、意義・貢献をテーマに討議。
国際森林年記念会議Ⅲ	・10月頃、ボランティア国際年10周年を記念し、市民協同の森づくりをテーマに開催。
国際森林年記念会議Ⅳ	・10月頃、民間企業・団体の参加が感じられる国民運動の統括として位置づけ開催。翌年以降の継続可能性をテーマとする。
第4回国内委員会	・11月頃に開催し、宣言の採択、活動のとりまとめ及び次年度以降の国民運動を提案。

国際森林年における取組スケジュール

12月　1月　2月　3月　4月　5月　6月　7月　8月　9月　10月　11月　12月

国際生物多様性年とのﾌﾞﾘｯｼﾞﾝｸﾞｾﾚﾓﾆｰ（石川県、12/18-19）

第9回UNFF会合（ﾆｭｰﾖｰｸ,1/24-2/4）
ハイレベル対話（2/2-2/3）
・国際森林年の立ち上げ
・国際森林映画祭の受賞作品発表 等

第66回国連総会（ﾆｭｰﾖｰｸ, 9月）
・活動状況の報告

国際森林年クロージングセレモニー（場所等未定）

国内委員会の設置

国内委員会の運営・普及事業の実施
（ウェブサイトの運営、企業等との連携 ）

第1回国内委員会

第2回国内委員会

第3回国内委員会

第4回国内委員会

民間企業等との連携

4/15～5/14
みどりの月間

地方と連携した記念行事

10/1～10/31
木づかい推進月間

~~みどりの感謝祭~~

全国植樹祭
和歌山県

国際森林年記念会議の開催

全国育樹祭
奈良県

【凡例】
国際森林年において新たに行う取組
既存の事業の活用による国際森林年への取組